

モモ産地の生き残りをかけた取り組み支援 ～ピンチをチャンスに～

■ J A香川県飯南地区モモ生産販売部会 ■

中讃農業改良普及センター(黒川 幸重 ○十鳥 幹雄 小野 壮一郎 氏家 英樹)

●対象の概要

J A香川県飯南地区モモ生産販売部会は、丸亀市飯山町及び綾歌町の丘陵地帯で消費者ニーズに応じた有望品種の導入に積極的に取り組むほか、一元集荷体制と共選共販体制をいち早く確立し、県下のモモ産地をリードしてきた。

平成15年には糖度、果皮色、果肉障害や熟度が測定・選別できる最新鋭の選果機を導入するとともに、平成25年には硬度の測定機能を付加し、果肉障害の混入を未然に防ぐなど、実需者の安心安全と信頼確保に対応してきた。

最近では、厳密できめ細かな選果を行いつつ、出荷形態を工夫することによる有利販売やモモの樹オーナー制度にも積極的に取り組む等、産地のブランド化に努めている。

●課題を取り上げた理由

平成27年7月に香川県の中央を縦断した台風11号により、飯南地区のモモは、樹の倒伏や枝折、果実の落果、果実のスレ等甚大な被害を受けた。

出荷最盛期を前に大部分の果実が出荷できず、樹体の損傷により次年度以降の生産回復が見込めない事態となり、関係機関が全精力をあげて産地復興に取り組むことが緊急の課題となっていた。



台風11号で甚大な被害を受けたモモ園地

●普及活動の経過

1. 被害の実態調査と改植の推進

そこで、関係機関と連携して被害の実態調査や事業説明会の開催を行い、台風による樹体への被害（ピンチ）を改植する機会（チャンス）と捉え、改植を進めようと呼びかけるとともに、産地復旧のための改植や関連事業の導入を支援し、将来の生産量の増大と選果場の効率的な運営による産地復興に努めた。



改植されたモモ園の状況

2. 適期収穫による安定生産支援

モモは果物の中でも可食日数が短いことに加えて、収穫適期が短いため適期収穫が求められている。また、かねてから、モモの果肉障害が問題となっていたことから、香川県農業試験場府中果樹研究所が開発した収穫予測式に基づき普及センターが設定した収穫予想日を参考としつつ、果皮色や長年の経験による手触り感により収穫を行っているが、夜蛾の被害や過熟果の発生が多くなり、収益性低下の一因となっていた。平成25年度に新しく導入された選果機の果実硬度測定機能を活用して市場の意見も反映させながらこれまで以上に厳密な収穫適期の基準値を設定することにより、夜蛾による被害の軽減や過熟果の減少による生産の安定を推進した。

また、これとあわせて、経験の浅い担い手が収穫適期を把握する方法の一助として、普及センターに整備されているフルーツセクター

を活用して、樹上での手触りによる感覚と果実糖度との関連性について調査し、果実収穫適期判定の手法について検討を行った。

3. 病虫害防除の徹底による安定生産支援

平成27年の台風11号による雨風はせん孔細菌病の発生を誘発し、講習会や現地巡回で徹底防除を呼びかけたものの、平成28年6月の記録的な長雨によって被害が更に拡大し、病虫害防除所からの調査速報が発令されるなど甚大な被害を受けた樹も散見された。こうしたなかで、効率的かつ効果的な防除をしようという機運が高まったことから、関係機関と連携してスピードプレイヤーを活用した防除組織の設立を支援した。

4. 継続的な土壌診断による適正施肥支援

モモは果樹の中でも適正pH基準が低いことから、改植予定園地の土壌環境の把握や施肥コストの低減並びに微量要素欠乏対策として、土壌診断の継続実施を呼びかけるとともに、診断結果に基づき処方箋を作成し、適正施肥講習会を通じ指導を行った。また、具体的な施肥の方法について説明するとともに、園地の状態を見ながら行う現地指導を組み合わせ、土づくりや施肥改善に努めた。

5. 生産工程管理による経営改善の提案

モモ栽培は5月～7月にかけて品種毎に摘果・袋掛け・除袋・収穫作業が重なるほか、マルチの敷設、新梢管理などの作業が集中する。

このため、作業適期を逃さないよう、時期別の管理作業の要点を記録して、次年度の時期別管理計画と作業ポイントの作成が重要になると考えられた。

そこで、モモ栽培に対応した「私のチェックシート」を作成し、剪定講習会の中で前年度の作業結果を確認してもらうとともに、次期作の作業計画の作成やカレンダーへの作業記録記帳を提案した。

●普及活動の成果

1. 生産意欲の向上で新・改植面積増大

平成27年度に近年にない新改植が行われたことを契機に、年々改植に対する機運が高まり、改植面積が増加している。(図-1)

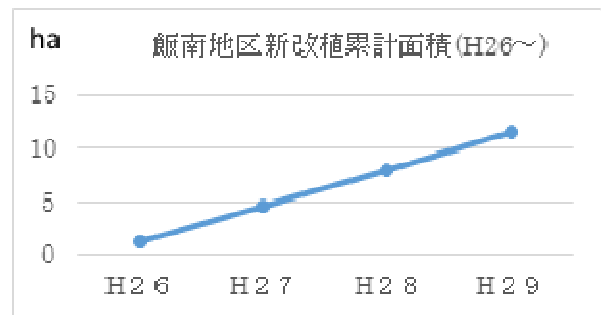


図-1 改植面積の推移（累積）

2. 適期収穫と選果の徹底で市場評価が向上
新しく導入した選果機により品質測定精度が高まり、適期収穫の幅が広がったことに加えて、厳密な選別により市場からのクレームもほぼ皆無となり、生産量が増加するとともに平均販売単価も前年を上回る結果となった。

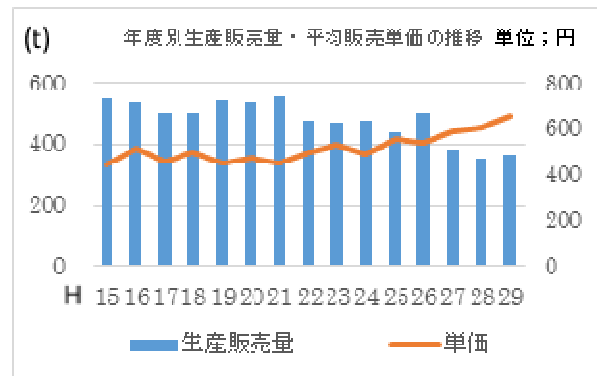


図-2 生産販売量・平均販売単価の推移

●今後の普及活動の課題

1. JAによる「飯南の桃」産地再生のための農業経営体設立支援

改植が進んでいるとはいえ、生産者の高齢化や後継者不足により、産地の維持が厳しい状況にある。また、平成27年の台風の被害による生産量の大幅な減少により選果場のランニングコストの増加が懸念されることから、JAにおいて、平成29年度から産地再生と選果場の健全な運営に向けて「飯南の桃」生産法人設立検討委員会を設立して、作業支援システムの構築や新たな経営体設立に向けた検討を進めている。

普及センターも本委員会に参画して関係者と一体となって「飯南のモモ」産地再生に向けて特に技術的な面での支援を行っていることとあり、有望品種の選定や品質安定技術について今後調査研究を行うこととしている。